

中国における人文教育およびキリスト教研究に関する考察
—共産党文化制度における基督教学術研究を中心にして—

李 劍峰

同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

要旨

今日において、中国のキリスト教研究は主に二つの伝統に基づいている。一つは、儒教を中心としている古い伝統であり、もう一つはマルクス主義を中心としている新しい伝統である。本稿は共産主義文化制度における人文教育およびキリスト教研究の現状と可能性について考察する。1980年以降のキリスト教学術研究の特殊な例として漢語神学を分析する。

キーワード

中国キリスト教、共産党、共産党文化制度、儒教、漢語神学

**A Study on Chinese Humanities Education and
Christian Education:
Focus on Christian Research under Communist Cultural Systems**

LI Jianfeng
Doctoral Student
Graduate School of Theology, Doshisha University

Abstract:

At the present time, Chinese Christian research is rooted in two traditional systems: an old traditional cultural system centered on Confucianism and a neo-traditional cultural system centered on Marxism. This study explicates the potential and current status of Christian research under the Communist cultural system, including theological education and research on Chinese Christian churches and academic institutions. Sino-Christian Theology will be applied through specific cases in order to analyze Christian academic research after 1980.

Keywords:

Chinese Christian, Communist, Communist Cultural System, Confucianism, Sino-Christian Theology

1. 序

今日中国で行われているキリスト教研究の背後には二つの伝統が隠されている。一つは儒家文化という古い伝統文化制度であり、もう一つはマルクス主義という新しい伝統文化制度である。本稿では、マルクス主義により指導されている中国共産党文化制度下におけるキリスト教研究の可能性、対面している問題およびその局限性を明らかにする。さらに、キリスト教研究と共産党文化制度との関係性を探る。上記の問いを社会学の視点から明らかにしたい。本稿は共産党文化制度から人文学教育および、人文学に属しているキリスト教学術研究を中心としているものである。特に鄧小平政権以降の改革開放時代（1980年代）からの人文学としてのキリスト教研究の状況を考察していく。

2. 共産党文化制度とは

共産党文化制度とは何か。共産党政権により、人民民主主義型の民族国家が成立されたと共に、大学、学術機構と出版社などの文化制度も社会主義イデオロギー的政党国家の文化体系に形成された。これを共産党文化制度というのである。その特徴は「中国の独特の社会体制の構造（国情）とマルクス主義の結合した産物である」¹。その結合というのは儒家文化制度における文化民族主義とマルクス主義における政治民族主義との結合である。この二つの文化伝統は共に共産党文化制度に包括された。共産党文化制度についての思考は、中国が近代社会に転換していくプロセスの中、民族国家の正当性にかかわる問題である。百年以来、西洋民族国家の近代的拡張の衝撃によって、中華帝国は近代民族国家の競争に応じて、改めて国家の形態（イデオロギー）と文化制度を再編せざるを得ない状況に迫られた。このような刺激の中、特に清の後期、儒教の知識人たちは儒教の伝統より民族国家の正当性を探ろうと試みていた。しかし、このような試みは西洋啓蒙思想によって挫折させられた。そこから中華人民共和国が成立するまでの数十年の激しい政治闘争を経て、中国共産党の知識人たちはマルクス主義の啓蒙思想を用いて、農民層を動員して国家の政権を握ることに成功した。その後、社会主義経済・政治制度を構築し、人民民主主義型の民族国家を基本的に構成した。それと同時に、共産党政権下の文化制度、すなわち、大学、学術機構、出版事業などの現代文化制度に対する社会主義的改造を伴う社会主義イデオロギーに基づく政党国家の文化制度も完成した。

今日の共産党文化制度は中国と西洋文化要素の産物である。すなわち、儒家文化制度における文化民族主義とマルクス主義における政治民族主義との結合である。このような結合された共産党文化制度はマルクス主義における政治民族主義を利用して社会主義と資本主義との衝突を解消させようと試みている。共産党文

化伝統が形成されるプロセスにおいては西洋文化の要素であるマルクス主義が儒教文化制度の中に導入された。同じように、このような結合によって、儒教文化思想は西洋文化構造であるマルクス主義の中にも導入された。このように、共産党文化制度が持つ目的は、西洋文化の要素（マルクス主義）を用いて西洋文化（資本主義）を超越すること、すなわち、マルクス主義と融合した新しい文化制度によって、西洋における資本主義に打ち勝ち、民族再生の政治と文化という目的を達成することである。

3. 共産党文化制度の3つの時期

共産党文化制度は3つの時期に分けることができる²。第一期は、1940年代始めから1950年代始めまでである。第二期は、1950年代始めから1970年代末までである。第三期は、1970年代末から今日までである。共産党文化制度が形成されてきた時期が分けられることにより、今日におけるキリスト教研究の可能性を明らかにすることができる。

第一期は、共産党文化制度の形成期である。1942年、延安において毛沢東が主導する整風運動³は始まった。この運動は特に文化人に対するものである。毛沢東はこの整風運動を通して、儒教式の共産党文化制度の原型を作り上げ、有効的に農民層を動員し、農民革命を組織した。

第二期は、共産党文化制度の完成期である。共産党は国家政権を取得した後、社会主義的な改造の名義により共産党文化理念を民族国家の制度化構築に移入し、国民党による民国時代の大学制度（特に文学院と法学院）、文化機構（特に新聞と出版機構）および漢字（拼音と簡体字）に対して改造し始めた。思想面において、知識人たちに対する社会主義的改造が主な中心である。このようにして、1950年代末において制度化された共産党文化制度がほぼ完成した。このような環境で形成された共産党文化制度は、後の社会主義建設と文化大革命においても重要な役割を果たした。

第三期は、共産党文化制度の転換期である。1970年代末から、鄧小平の改革開放政策において、中国経済が飛躍的に成長してきた。しかし、経済の急成長とともに、社会主義理念が弱化し、個性を持つ思想空間が拡大しつつあるという現象が生じている。大学などの研究機構において、学術研究に以前よりかなりの自由が与えられたことは転換期における著しい特徴である。

共産党文化制度が形成された第一期と第二期において、キリスト教研究は激しい政治闘争によって禁止されていた。しかし第三期において、政党が文化制度の理念をコントロールする力が弱化することにより、共産党文化制度においてキリスト教学術研究を進める余地ができた。このような政治空間においてキリスト教

研究は可能となっている。これは、共産党文化制度が形成されたプロセスの中、マルクス主義において宗教、とりわけキリスト教の要素が無視されたが、イデオロギーが弱化した状況により、このような無視された宗教的なものに対する研究が再び復活したと理解することができる。しかし、今日の中国のキリスト教研究は哲学的・思想的に偏向しているという批判がなされている。その原因は次の章で説明していく。

4. 共産党文化制度における外国語原典の翻訳事業（1980年代以前）

中国における西洋古典文献の翻訳は、百年以上の歴史を持っている。百年来、中国語に翻訳された文献の種類は、西洋哲学、政治思想、史学、社会学および倫理学などである。1949年共産党政権が確立された後、西洋学文献の翻訳作業は再び共産党文化制度内における非常に重要な事業として位置づけられている。建国後まもなく激動した政治闘争の関係で、このような翻訳作業の担当者が社会科学院に所属しており、翻訳された書籍のほとんども公開されず、内部資料として限定された読者にのみ閲覧されていた。

当時の社会科学院は二つの大型プロジェクトを担当した。一つはマルクス全集の翻訳である。マルクス主義は共産党文化制度の基本的理念であるので、マルクス全集の著作の翻訳は、中国における文化理念の社会主義的改造に対して深遠なる意義を持っている。さらに、マルクス全集の翻訳により儒家文化の西洋化を促した効果もある⁴。もう一つのプロジェクトは、西洋哲学、社会科学における学術著作の翻訳である。社会科学院が1956年に発表した『哲学社会科学重要著作選訳目録』によれば、このプロジェクトによって翻訳される予定の著作は1630冊であり、30年間に亘って完成される予定である⁵。そのため、このプロジェクトに起用された担当者のほとんどは、1920年代に欧米に留学した経験を持つ学者である。翻訳作品の統一のため、社会科学院は翻訳規則、学術用語と人名などの専門用語について詳しく規定を定めた。

1950年代、60年代の翻訳の意義について劉小楓はこのように評価している。すなわち、「中国文化思想の構造と性質の変化に対して相当大きな役割を果たした。そして西洋思想と中国の文化思想の融合に対して促す効果を発揮した」⁶という評価である。さらに、この時代の翻訳事業は後に現れてきたキリスト教学術研究に対する意義については、次のように考えられる。すなわち、今日において、漢語神学が代表している中国文学におけるキリスト教学術研究は、哲学的・思想的な研究に偏しているというものである。今日のキリスト教学術研究者の多くは1940年代、50年代に生まれ、60年代と70年代に教育を受けた。当時使用されていた教材は50年代に翻訳されたものである。この時期に翻訳された著作のほとん

どは、哲学的・思想的なものである。これが、今日の中国キリスト教研究が哲学的・思想的に傾いている原因だと筆者は理解している。

5. 共産党文化制度におけるキリスト教学術研究の概念

以上、共産党文化制度の概念と歴史について論じてきた。このようなマルクス主義を中心にして作られた共産党文化制度におけるキリスト教研究の様相を明らかにする上で、その問題点についても指摘したい。

まず、共産党文化制度における「キリスト教研究」の概念について論ずる。中国では、共産党文化制度におけるキリスト教研究というのは二つの流れにおいて行われている。一つの流れは中国キリスト教会、ここでは特に「三自愛国教会」におけるキリスト教（神学）研究である。もう一つの流れは、大学などの学術研究（教育）機構におけるキリスト教研究である。

まずは、中国キリスト教会におけるキリスト教（神学）研究について論じてみる。ロゴスに関して中国キリスト教会は神の絶対的な言葉として認識し、この点について大学などの研究機構におけるキリスト教研究と異なる理解を示している。教会の神学は神の言葉であるロゴスに対して常に耳を傾け、聞き手として自己認識している。そして、神学教育の目的はこの神の言葉の宣教である⁷。1980年代以降、中国キリスト教会は主に二つのことに対して働いてきた。一つは、文化大革命期間中に破壊された宗教的活動の回復である。もう一つは神学思想構築における聖職者養成である。後者に関して、中国南京にある金陵協和神学院を中心として、各地にある神学院は神学思想構築と若手聖職者養成を主な働きとして展開してきた。今日の中国キリスト教会の指導部のほとんどのメンバーは1980年代に卒業した若手聖職者、あるいは研究者である。

次は、中国大学などの研究（教育）機構におけるキリスト教研究について論じていく。この領域に従事している人文学者のほとんどは非キリスト教信者である。そのため、彼らに従事してきたキリスト教学術研究は、既存教会（三自愛国教会と家庭教会）からの制限に束縛されていないという特徴が見られる。単純に一種の非教会性をもつ人文学術研究である。単純に学術領域に属しているキリスト教研究は、既存教会、ないし諸教派の教理に対して関心を持たず、文化、ないし思想としてのキリスト教に関する研究である。ここに共産党文化制度におけるキリスト教学術研究がもつ、もう一つの意味がある。すなわち、マルクス主義に指導されている共産党文化制度は、キリスト教思想と中国文化との融合を促進したという意味である。なぜなら、今日における中国のキリスト教研究はある程度の自由が与えられているとは言えるものの、その研究は依然として共産党文化制度の枠内において行われているからである。中国におけるキリスト教研究は、中国にお

ける人文学術領域内のキリスト教学術研究として文化、ないし思想としてのキリスト教学術研究の歴史的意味をもっているのである。

劉小楓は「共産党文化制度の中の基督教学術」という論文の中で、中国の大学などの研究機構におけるキリスト教研究の事例しか論じていない。しかし、筆者は共産党文化制度におけるキリスト教研究は中国の大学などの研究機構のみではなく、中国キリスト教会のキリスト教（神学）研究も共産党文化制度におけるキリスト教研究の一つの部分だと理解している。なぜなら、中国のプロテスタント教会の公式の名称は「中国基督教三自愛国運動委員会」と「中国基督教協会」である。前者は政治的な組織であり、後者は前者の指導のもとで宗教的活動を行っている組織である。そして、中国キリスト教会のすべての活動は中国共産党の指導のもとで展開しなければならない。それゆえ、中国キリスト教会側の神学研究活動も共産党文化制度の一部だと筆者は劉小楓と異なる理解を有している。

中国キリスト教会における神学研究であれ、大学などの研究機構におけるキリスト教研究であれ、共に共産党文化制度を通して中国文化思想の一つの構成要素に転換させられ、共産党制度という枠組みに囲まれてしまった。キリスト教研究だけではなく、中国におけるすべての学術研究も共産党文化制度という枠内で行われている。中国憲法第 47 条⁸により学術の自由が保障されているが、このような政党的制度の下で行われている学術研究の自由度が疑われている⁹。このような現象は中国だけではなく、日本にも存在していた。

日本の場合、明治時代に制定された『大日本帝国憲法』において「言論の自由」という条項が書かれているにもかかわらず、「法律の保留」という文言に制限されていた。さらに、戦時中においてすべての反戦言論が抹殺された。例えば、非戦論の代表者である矢内原忠雄は盧溝橋事件の直後の 1937 年 9 月に『中央公論』に掲載した『国家の理想』において、「自己存在の存続を理由とする対外戦争」¹⁰をストレートに批判した。この批判により矢内原は東大を辞職せざるを得ない状況に陥ってしまった。今日の中国において学問の自由が保障されているが、その自由の限度がどこにあるか、あるいは学問に対する制限が如何なる形式なのであるか、という問いは残っている。これは筆者にとってこれから追求していく課題でもある。

6. 共産党文化制度におけるキリスト教学術研究の現状（1980 年代以降）

ここで明らかにする問いは、今日における共産党文化制度内で行われているキリスト教学術研究の現状である。そしてキリスト教学術研究と共産党文化制度との関係についても追求していく。前章と同様に中国キリスト教会側の神学研究と大学などの研究機構におけるキリスト教研究の二つの流れにおいて論じていく。

1980年代以降中国キリスト教会は宗教活動を回復しながら、神学思想を構築してきた。1990年代に入って、教会の宗教活動は通常の軌道に戻ってきた。当時の「中国基督教協会」の会長である丁光訓は「中国の特色があるキリスト教神学構築」という目標をあげた。1991年、丁はイギリスにおいて「宇宙の基督」と題して講演を行った。丁の講演により、中国の独特の社会状況とキリスト教神学思想が結合されている¹¹。中国キリスト教会側の神学構築は、聖書研究、中国社会に適合する多元化問題、中国教会の「三自原則」の発展を中心にして、神学研究を行っている。

文化大革命が終焉した直後の1980年代の中国大陸の学術界において、「洋学」（西学）を導入しようというブームが起こり、「五・四運動」以降の「新啓蒙運動」と言われている¹²。このようなブームの中で、一部の学者たちは、「洋学」を導入する際に、西洋啓蒙主義以降のキリスト教思想と西洋文化との間に存立している緊張関係に注目した。さらに、1980年代における中国社会には、民間宗教に対する人気度が急上昇するという現象も起った。文化大革命において抑圧された民衆は、「解放」された直後に宗教から希望と慰めを求め始めた。このような現象は人文学者たちの目をも引いた。民衆の要望に応じて、そして民衆に宗教知識を普及するための著作が続々出版された。1980年代後期以来、中国大陸においてキリスト教書籍が続々出版されてきた。出版された類型からみれば、キリスト教文化の書籍の翻訳、百科全書、辞書、歴史などである。シリーズとしては、『宗教と世界』（原文：『宗教興世界』）、『歴代基督教学術文庫』、『基督教学術研究文庫』がある。学術誌としては、『宗教』、『世界宗教資料』、『基督教文化評論』、『宗教文化論叢』が刊行されている。このような書籍は共産党文化制度において出版されたものである。このような専門的研究書以外に、学術論文なども以前よりかなり増えてきた¹³。大学など多くの高等教育機関においてキリスト教研究機構が設立され、そして宗教、ないしキリスト教課程も設置されてきた。さらにこの宗教・キリスト教課程の修士・博士コースまで設置された大学も増加した。このような現象は中国大陸におけるキリスト教研究にとって、1949年以来未曾有のことだと言える。このような現象から見れば、キリスト教学術研究が既に共産党文化制度の重要な部分になっていることは明らかである。

中国大陸におけるキリスト教研究は主に下記の研究方向を示している。a) 宗教学的キリスト教研究。宗教としてのキリスト教に対して、哲学、社会学、人類学と文化学の角度から研究を行っている。b) キリスト教思想史研究。それは、思想史領域における初代教会、古代教会とスコラ哲学などの研究である。c) キリスト教史研究。キリスト教会史、とりわけ中国におけるキリスト教の歴史を中心にして研究である。d) キリスト教文芸研究。それは、西洋と中国におけるキリス

ト教文学、芸術に関する歴史的考察である。e) キリスト教神学研究。ここで指し示している「キリスト教神学」とはキリスト教の教義（Dogmatics）のことを指している。つまり、神学の類型から見れば、組織神学に属している分野である。

上記の通り、中国大陸におけるキリスト教研究の方向をみれば、1980年代以降のキリスト教研究のいくつかの特徴が現れている。まず、人文学的・思想的研究の性格が強く見られることである。つまり、1920年代から始まったキリスト教の土着化（本色化）に比べて今日のキリスト教学術研究は教会の指導体制、典礼儀式などの教会運営に関わる実践的な課題より、もっと抽象的・学術的傾向が示されている。今日のキリスト教学術研究者は教会の外部、ないし教会の周縁からキリスト教理解を示しているのも、実践的なものではなく、学術的・思想的な性格を持っている。そのため、中国大陸におけるキリスト教研究の目的はキリスト教会のためのものと言えず、それは共産党文化制度における宗教研究の不足を充たすという目的である。

今日における中国のキリスト教学術研究の成果は主に漢語神学¹⁴に現れている。漢語基督教文化研究所所長である楊熙楠は次のように広義と狭義という二つの面において漢語神学に定義を与えた。すなわち、広義的な漢語神学とは、民族・地域にかかわらず、すべての漢語で書かれている神学作品を指す。この意味では、漢語神学は数百前年からすでに始まったと言えるであろう。それに対して、狭義的な漢語神学は、殊に1980年代中国大陸の学者たちが提出したキリスト教研究に対する定義である。上記のように中国大陸におけるキリスト教研究者は人文学の場に立ち、キリスト教信仰を人文学の領域において研究しようと考えている。このような狭義的な漢語神学の定義は中国の文化キリスト者たち（文化基督徒）の神学思想であるように見える。文化キリスト者が思考している神学は人文社会学から出発した哲学的論述である。この種類の神学研究は、教会の場に立っている神学校から発信する教会教義学とは異なっている。漢語神学者は神学における言語、とりわけ母国語の重要性と民族の生存体験に強調点を置いている。異なる民族の言語およびその言語によってもたらされた生存体験と文化資源は神学の媒体になる際に、その宣教の機能と神の言葉が拘束される局限性が併存しているので、一方において記述している啓示を歪曲してしまう危険性を持ち、他方において新たな光を発することもできる。一般的に神学者たちは自分の母国語、あるいは特定の環境において自分が主に使用している言語を用いて、神学思考を論述している。ほとんどのすべての神学論述はその神学者の「母語」で書かれていると言えるのであろう。言い換えれば、すべての神学は「母語の神学」である。この「母語の神学」という理解が漢語神学の根拠であると筆者は理解している。しかし、言語というのは単なるシンボルではなく、民族性と強く連携している。一つの言

語の中に、その言語を話す民族の生存体験と思想も含まれている。特にイデオロギーを表す機能を果たす場合に、排他性が強く現れている。言語を強調し過ぎると、「ドイツの神学」、「日本の神学」が歩んだ道を歩む危険性が現れてくる可能性もある。

さて、中国におけるキリスト教学術研究と共産党文化制度はどのような関係を保っているのか。結論から言うと、互いに利益を与える関係が保たれている。中国におけるキリスト教学術研究の場所は教育機構である大学、大学に属する研究所、あるいは中国社会科学院などの研究機構である。いずれも国に所有されているものである。特に指摘しなければならないことは、前述のようにこれらの研究は共産党文化制度下に展開されるものである。共産党文化制度は研究者たちに研究の自由と財政上の利益を与える一方、キリスト教学術研究により文化大革命によって欠けた宗教研究の空白を補うことができる。さらに、アメリカをはじめ西洋からの人権および宗教に関連した批判に反論するための力にもなる。

7. 共産党文化制度におけるキリスト教研究の意義

1980年代文化大革命の終焉後、中国キリスト教会の宗教活動と大学などの研究・教育機構の研究活動は共に正常な軌道に復帰してきた。種々の批判される問題点が依然として存在しているが、中国社会において意義のある現象だと言わざるを得ない。本章において、共産党文化制度における中国キリスト教研究の意義を明らかにしたい。

1980年代に中国政府は鄧小平のもとで「改革開放」政策を立てた。1990年代に入って、大きな成果を収めることができた。しかし、国有企業の私有化に伴う大規模な失業現象も現れた。そして、経済発展の副作用としての貧富の差は次第に拡大された。このような社会状況の中、中国キリスト教会は1949年以降未曾有の成長を迎えた。しかし、この時期に教会にきた人たちのほとんどは経済的貧困者である。このような現象に対して、中国キリスト教会の神学構築は中国社会の現状にふさわしい神学を思索していた。当時の精神的な面における需要に応えることができた。したがって、中国社会の安定に対して、中国キリスト教会は積極的な役割を果たした。

しかし、キリスト教知識の普及としては教会の力は大学などの研究機構に及ばない。なぜなら、中国において聖書などの出版物は宗教的なものなので、一般書店に並べることができない。一方、大学などの研究機構における出版物は普通の書店でも入手することが可能である。そして、1980年代以降キリスト教に関する課程を設置する大学が増加したので、キリスト教会史、聖書概論、キリスト教倫理学などの授業も増えてきた。この点において、大学などの研究機構のキリスト

教研究に対して評価することができる。

最後に、大学などの研究機構のキリスト教研究の持つ意義を強調したい。それは、中国政府の宗教管理に対して、助言する役割を果たすことができる。大学などの研究機構は学術機構として、キリスト教思想、哲学、文学、歴史を研究するかたわら、中国のキリスト教の状況を調査するフィールドワークなどの実践的なことも実施している。調査結果を分析し、キリスト教の社会的役割を客観的に評価している。そしてこの評価に基づいて中国政府が宗教政策を立てる際に、参考にすることができる。これは共産党文化制度におけるキリスト教研究の特殊な意義ではないかと筆者は評価している。

8. 結

1980年代以降、中国大陸における宗教、とりわけ西洋宗教であるキリスト教に対する研究環境は以前より改善された。特に2000年代に入ってから、キリスト教書籍の出版なども以前より容易になった。しかし、どうしても避けられない事実、キリスト教研究が依然として共産党文化制度内において行われていることである。言い換えれば、中国におけるキリスト教研究は依然としてイデオロギーによって制限されている。そして、共産党文化制度に依存せざるを得ない状況をどうしても避けることができない。特に、中国の経済的急成長と共なる民族主義が高揚されている今日において、このようなキリスト教研究と共産党制度の「相互依存」は危険性をも伴う。このような「相互依存」的關係によりもたらされた危険は戦時中の日本にも存在していた。一例を挙げると、戦時中に日本キリスト教神学研究の中心の一つとしての「日本のキリスト教」はその典型的な例である。原誠の論説によれば、それは「日本の伝統的な精神・思想・宗教とキリスト教との接合をはかる思想の総称」¹⁵である。その接合は日本の伝統的精神思想—例えば、「家族制度」や「皇室中心主義」—とキリスト教の中心思想との関係である¹⁶。戦時中の日本と同じように、今日の中国キリスト教会、ないしは神学研究にとって、ひとつの大きな目標は「中国的キリスト教神学思想」の構築である。今日の中国キリスト教研究は戦時中の日本の状況と比べ、それほど危険性は見えない。しかし、日本のような前例を参照する必要があると筆者は強く認識している。少なくとも、日本の例は中国におけるキリスト教研究にとって戒めである。さらにもう一つの現象を検討しようと思う。それは、戦時中の日本であれ、今日の中国であれ、宗教は繁栄するということである。日本の場合、当時において、存続ができた宗教団体は国家（軍政権）に承認されたものだけであった。つまり、戦争を支持する宗教団体は存続することができ、反戦思想を唱える団体が排除されたのである¹⁷。国民精神総動員のため、宗教を「繁栄」させたとも言える。今日の

中国を見れば、宗教が持っている一つ重要な役割は国家安定のためである。すなわち、国家安定にとって、積極的に活動している宗教団体を自由に発展させるということである。同じ意味で、キリスト教神学研究も同様である。このような状況において、学術研究の自由度は疑われるであろう。

共産党文化制度におけるキリスト教研究を論ずる際に、中国キリスト教会側の神学研究を避けることはできない。中国の研究者にはこの認識が欠けているかもしれない。1980年代以降誕生した「漢語神学」は大学などの研究機構の研究成果である一方、中国キリスト教思想史を論ずる際には、キリスト教会側の神学研究にも目を向ける必要がある。

本稿は共産党文化制度の概念と歴史を示した上で、共産党文化制度内におけるキリスト教研究の様相も明らかにした。すなわち、海外のキリスト教研究と異なり、中国大陸におけるキリスト教神学研究は共産党文化制度に依存する特殊な性格をもっている。これは中国大陸におけるキリスト教研究の一つの特徴とも言える。これからのキリスト教研究は共産党文化制度の枠を脱出することは不可能と言えるほどの困難が存在している。このような特殊な状況において、中国社会に対する積極的なキリスト教研究が現れることを、筆者は期待している。

註

¹ 劉小楓 「共産党文化制度の中の基督教学術」『文化基督徒：現象と論争』（中国語『文化基督徒：現象與論争』）漢語基督教文化研究所 1997 63頁。原文：「中国独特的社会机体结构（国情）与马克思主义结合的产物。」

² 同上 64頁。

³ 1942年に、毛沢東は延安（Yan-An）において、共産党内部における整風運動を行った。毛沢東が提唱した「学風」（学習の態度）、「党风」（党活動のやり方）と「文風」（言語、文章活動）という「三風整頓運動」のきっかけは文化人の問題を解決することである。整風運動の意義は、政治、ないし政党のために文化が用いられたことに見られる。これは本文で使用している儒教式の共産党文化制度のことである。

⁴ 前掲書 67頁。原文は「翻译马克思主义经典对改塑中国的文化理念机体有深远影响，从这一意义上说，它推进了中国文化的西方化。」（日本語訳：「マルクス主義の著作の翻訳事業は、中国文化理念の改造に対して深遠なる影響になる。この意義において、それは中国文化の西洋化を促した。」）

⁵ 同上 68頁。この箇所のデータは、劉小楓が陳太先（Chen Taixian）著 『「自然政治論」訳後記』（商務出版社 1994）の429頁を参照したものである。すなわち、本文はその参照の孫引きである。

⁶ 同上 68頁。原文：「对改变中国文化思想的内在结构和品质，起了相当大的作用，促成

西方思想溶入中国的文化思想。」

- 7 中国金陵協和神学院の教授である王艾明（Wang Aiming）は「中国教会神学思想建設に関する理解-神学积義学面から展開」（原文は「理解中国教会神学思想建设事工-从神学解释学层面展开」である）において中国キリスト教会の神学建設の目的に関して理解を示している。『神学：教会が思考している—神学思想建設と中国教会』（原文は『神学：教会在思考—神学思想建设与中国教会』）1-11 頁参照。
- 8 『中華人民共和国憲法』第 47 条「中華人民共和国公民は、科学研究、文学・芸術創作その他の文化活動を行う自由を有する。国家は、教育、科学、技術、文学、芸術その他の文化事業に従事する公民の、人民に有益な創造的な活動を奨励し、援助する。」<http://www.togenkyo.net/modules/reference/28.html> より引用（ダウンロードは 2014 年 3 月 4 日 16 時 28 分である）。
- 9 学問の自由は『中華人民共和国憲法』により保障されているが、第 52、53、54 条に規定されている条文に制限されているのではないかと筆者が疑問に感じている。しかし、これは本稿が取り扱っているものではない。
- 10 小川原正道 『日本の戦争と宗教 1899-1945』 講談社 2014 145 頁。
- 11 丁光訓 「宇宙の基督」（原文は「宇宙的基督」である） 『丁光訓文集』 訳林出版社 1998 90-99 頁参照。この論文は丁光訓が 1991 年 7 月にイギリスの「中国教会の友」大会で行った講演である。
- 12 『道風：キリスト教文化評論』 第 29 期 21 頁。
- 13 1949 年以降中国大陸で刊行された学術論文の詳細は王維江と寥梅が書いた「基督教文化研究中文論著索引：1949-1993」（朱維淨編、『基督教興近代文化』、上海人民出版社、1994、429-488 頁）を参照。
- 14 本文における「漢語神学」というのは、1980 年代以降中国大陸の大学、学術研究機構におけるキリスト教学術研究のことを指している。
- 15 原誠 『国家を超えられなかった教会—15 年戦争下の日本プロテスタント教会』 日本キリスト教団出版局 2005 50 頁。
- 16 小川原 前掲書 179 頁。
- 17 同上 121 頁。